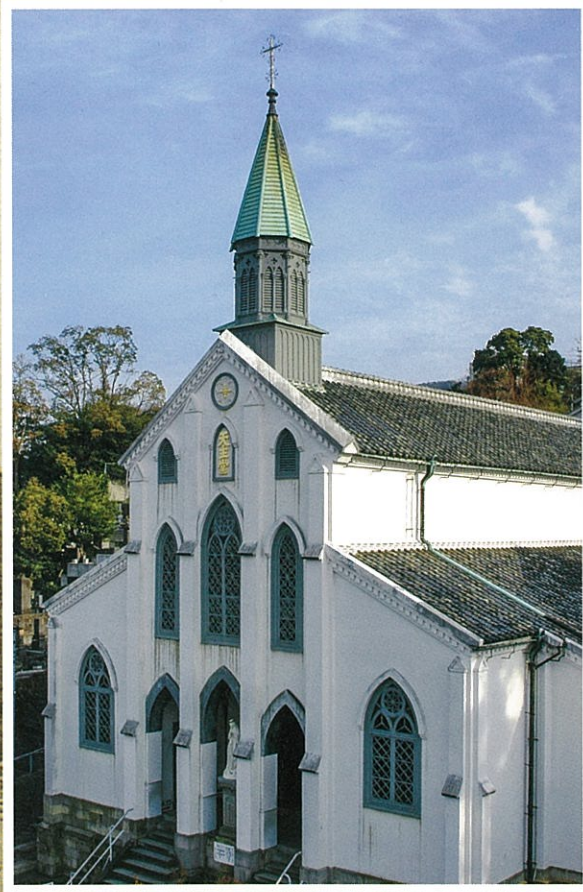


こころの自由 ここにはじまる

# 大浦天主堂物語



〈目次〉	
ようこそ、大浦天主堂へ	1
日本二十六聖人にささげられた大浦天主堂	2
創建時の大浦天主堂	4
大浦天主堂の写真点描	6
第1章 キリスト教の伝来と繁栄	12
第2章 キリスト教の禁教と鎖国	14
第3章 潜伏キリシタンの生活	16
第4章 日本の開国と大浦天主堂創建	18
第5章 信徒発見と浦上四番崩れ	24
第6章 信教の自由獲得と軍国主義	28
第7章 被爆からの復興	30
第8章 ローマ教皇来日と平和への祈り	32

表紙中央は現在の大浦天主堂。背景は日本二十六聖人が殉教した西坂のそば(福濟寺裏山)から長崎を一望した明治10年代中頃の古写真。表紙中央には出島、左側には居留地があり、その後ろ高台に増改築後の大浦天主堂の白い尖塔が見える / 長崎大学附属図書館所蔵

大浦天主堂物語  
監修 カトリック長崎大司教区  
執筆 長崎の教会群インフォメーションセンター

# ようこそ、大浦天主堂へ

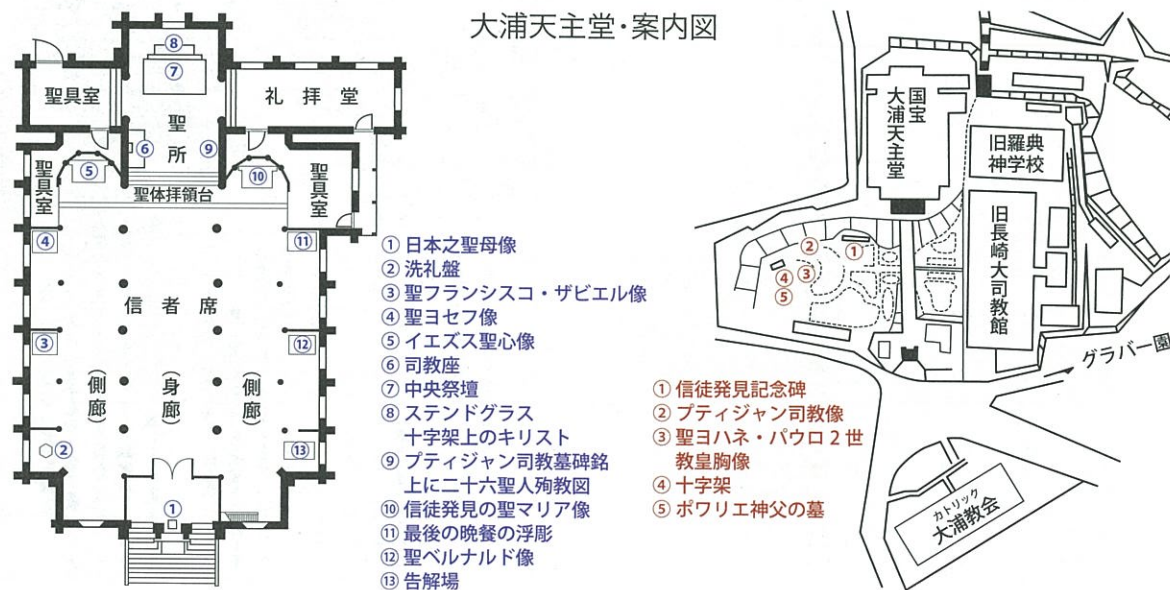
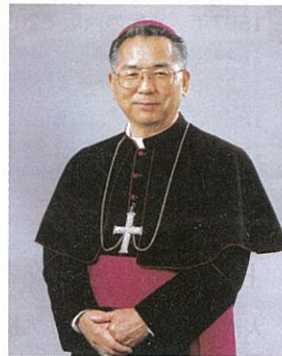
2015年、大浦天主堂は創建150年を迎えました。美しい異国風の建物は、歴史文化都市・長崎のシンボルとしてわたしたちを魅了してくれます。一方で、その歩みは、「こころの自由」を獲得する苦難の連続でした。

日本と西洋の最初の出会いは、コロンブスらが活躍した大航海時代に始まりました。ポルトガル人宣教師が伝えたキリスト教は各地に広まりましたが、やがて禁教と鎖国で、西洋との交流は長崎の出島に絞られました。2度目は幕末の出会いです。産業革命によって欧米は交易を求めて世界に進出します。日本も黒船の来航で安政の開国が実現すると、長崎には外国人商人や討幕派の志士たちが集います。

大浦天主堂は、こうした混沌とした幕末に、安政の条約に従って、おもにフランス人のための教会として誕生しました。ところが、長崎県には禁教令下密かに信仰を守ったキリシタンが多く、この天主堂を舞台に世界宗教史上の奇跡「信徒発見」がなされます。しかし、明治時代を迎えても禁教は続き、浦上四番崩れなどの大迫害が起ります。これに対する西欧諸国の非難でキリスト教は1873年（明治6年）に黙認されますが、その後も軍国主義による抑圧、そして被爆と苦境は続きました。

さあ、美しい教会に秘められたそのドラマを旅してみましょう。あり余る自由に満たされた現代のわたしたちにとって、自由の意味と意義を考える機会になることでしょう。

カトリック長崎大司教区  
大司教 高見三明



# 明治初年の大浦天主堂と長崎港



大浦天主堂が創建された1865年から3年後、1868年（明治元年）ころ、星取山から大浦居留地越しに長崎港を鳥瞰した写真。左矢印の先に大浦天主堂の尖塔が小さく見える。右の湾の奥には1730年（享保15年）から埋め立てられた浦上新田が見え、中央右よりの出島はまだ埋め立てられていない。その後ろには長崎の市街地が広がり、その奥に二十六聖人が殉教した西坂が続いている。湾内には多くの外国船が停泊し、明治維新の頃の雰囲気を読みとれる/長崎大学附属図書館所蔵

# 現在の大浦天主堂



大浦天主堂創建から150年、長崎原爆の被災を乗り越え、カトリック長崎大司教区（長崎県内）の教会は130を擁するまでになった。大浦天主堂の写真左横には、信者が通常のミサをささげる大浦教会の尖塔が見える。正面に見えていた二十六聖人殉教地は、長崎駅周辺の高層ビルで直接見えなくなったが、西坂のすぐ近くを見渡すことはできる。大正時代には上海航路の起点だった出島岸壁は、平成になって長崎水辺の森公園に生まれ変わり、天主堂下の松が枝国際埠頭は豪華客船が頻繁に出入りする。150年前の迫害を耐えた天主堂は、現在も威厳を保ち、長崎を見守っている。

# 日本二十六聖人にささげられた大浦天主堂



西坂公園の日本二十六聖人殉教記念碑(1962年、舟越保武作)

## 二十六聖人の素顔(記念碑の左から)

名前	年齢	殉教までの経緯
パウロ鈴木	49	尾張生まれ。深い学識を持った修道士で、京都の病院の院長としても活動。
ガブリエル	19	伊勢生まれ。京都奉行の家来だったが、洗礼を受けて神父を手伝う。
ヨハネ絹屋	28	京都生まれの絹織物職人。外国人神父との交流や兄の勧めで洗礼を受ける。
トマス・ダンギ	36	伊勢生まれ。大阪の薬屋。正義感強く、フランシスコ会初の日本人修道士の一人。
フランシスコ	46	京都生まれ。大友宗麟の侍医で、朝鮮出兵を経て聖ヨゼフ病院で活動。
ヨアキム榊原	40	大阪生まれ。医師を志すが、洗礼を受けて教会建設や貧しい病人のために活動。
トマス小崎	14	ミゲル小崎の息子で、伊勢生まれ。信心深い少年で、大阪の病人のために活動。
ボナベントウラ	不明	京都生まれ。幼い頃に洗礼を受ける。キリスト教の教理を学び、宣教に活躍。
レオン烏丸	48	尾張生まれ。パウロ茨木の弟。京都の病院でハンセン病患者の世話をを行う。
マチアス	不明	京都生まれ。別人マチアス逮捕時に「私もマチアスです」と殉教を志願。
フランシスコ・デ・サン・ミゲル	53	スペイン生まれの修道士。フィリピンの病院で日本人患者と出会い、日本での布教を志す。1593年に来日後、貧民や病人を援助する愛徳の実践者として活動。
フランシスコ・ブランコ	28	スペイン生まれで、メキシコで神父になり、フィリピンへ。1596年にマルチノ神父とともに来日。数ヶ月の学習で、神の教えを説くことができるほど日本語が上達。
ゴンサロ・ガルシア	40	インド生まれのポルトガル人修道士。16歳で来日後、フィリピンに渡り、バプチスタ神父とともに再来日。抜群の語学力で、神父が秀吉と謁見する時に通訳となる。
フィリップ・デ・ヘスス	24	メキシコの裕福な家に生まれる。フィリピンで修道士として活動し、神父になるためサン・フェリペ号でメキシコに向かう途中、土佐に漂着。大殉教のきっかけとなる。
マルチノ・デ・ラ・アセンシオン	30	スペイン人神父。メキシコからフィリピンに渡り、大阪の修道院長として1596年に来日。語学に恵まれ、バプチスタ神父とともに日本で指導的な役割を果たす。
ベドロ・パウチスタ	48	スペイン人神父。フィリピン総督の使節として1593年に来日し、日本のフランシスコ会の基礎を築く。京都と大阪で修道院と病院をつくり、日本の指導者として活動。
アントニオ	13	中国人父と日本人母の子で長崎生まれ。京都でキリスト教の教理を学ぶ。
ルドビコ茨木	12	尾張生まれ。修道院で働き、神父が捕まると、自らも捕まえるようお願い出る。
ヨハネ五島	19	長崎・五島列島の生まれ。イエズス会の活動を手伝っていたが、大阪で捕まる。
パウロ茨木	54	尾張生まれの武士。修道士となり、貧者や病人の世話をし、宣教に尽力。
パウロ三木	33	摂津生まれで安土セミナリヨ第1期生。熱烈な修道士として長崎や大阪で活動。
ディエゴ斎藤	64	備前生まれ。仏教徒になった妻と離縁し、大阪のイエズス会会堂で働きながら宣教。
ミゲル小崎	46	伊勢生まれの弓師。洗礼を受け、京都や大阪で修道院の建設などに協力。
ペトロ助四郎	不明	京都生まれ。殉教者の世話をするため付き添ったが、途中で自ら殉教を志願。
コスメ竹屋	38	尾張生まれの刀研ぎ師。大阪の修道院で伝道士として活動中に捕まる。
フランシスコ吉	不明	京都生まれの大工。長崎に送られる殉教者に同行し、途中で自ら殉教を志願。

## 日本二十六聖人の殉教

- 1549年 ザビエル来日、キリスト教を布教
- 1587年 豊臣秀吉、伴天連追放令を發布
- 1593年 バウチスタ神父、比総督使節として来日
- 1596年 サン・フェリペ号、土佐に漂着
- 1597年 長崎の西坂で26人の大殉教
- 1614年 徳川幕府、全国に禁教令を發布
- 1627年 26殉教者、福者に列せられる(～1629年)
- 1862年 26殉教者、聖人に列せられる
- 1865年 二十六聖人にささげる大浦天主堂、完成
- 1962年 二十六聖人の記念碑と記念館、西坂に完成

豊臣秀吉は、スペイン領フィリピンの総督に朝貢(属国化)を要求し、総督使節としてフランシスコ会のバウチスタ神父が来日。布教しない条件で京都に滞在したが、布教を行い、フランシスコ会員の来日が増える。

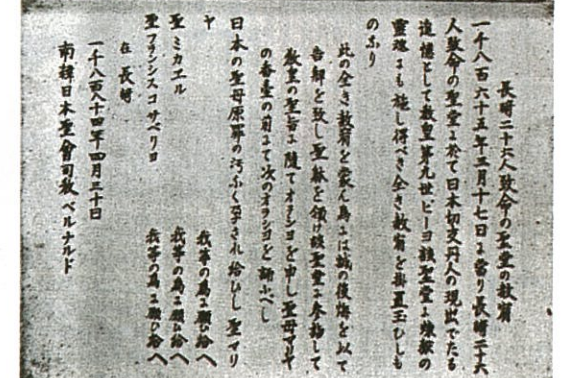
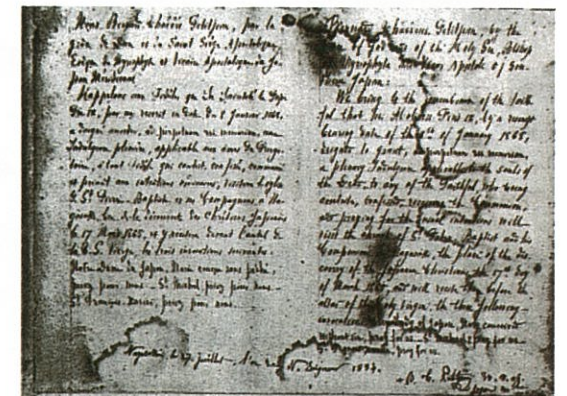
スペイン船サン・フェリペ号の漂着事件(1596年)で、「スペインは宣教師を派遣して現地人を改宗させて占領する」との話を危惧感を強めた秀吉は、フランシスコ会関係者を中心に26人を捕まえ、1597年2月5日に長崎で処刑。この中にはパウロ三木修道士のほかヨハネ五島、ディエゴ斎藤らのイエズス会関係者も含まれる。

## 日本廿六聖殉教者堂赦宥

大浦天主堂の聖母マリア祭壇の右前方の円柱には、ローマ教皇ピオ9世による「日本廿六聖殉教者堂赦宥」に関する諸条件を記した額が掲げられていた(現在は旧羅典神学校1階のキリシタン資料室に展示)。これは、大浦天主堂が日本二十六聖人にささげられた聖堂であることを示している。

一千八百六十五年三月十七日に当り長崎二十六人致命の聖堂に於いて日本切支丹人の現出でたる追憶として教皇第九世ピオ該聖堂に煉獄の靈魂にも施し得べき全き赦宥を掛置玉ひしものなり  
此の全き赦宥を蒙ん為には誠の後悔を以て告解を致し聖体を領け該聖堂に参詣して教皇の聖旨に随てオラショを申し聖母マリヤの香台の前にて次のオラショを誦ふべし

日本の聖母原罪の汚なく孕され給ひし  
聖マリヤ 我等の為に願い給へ  
聖ミカエル 我等の為に願い給へ  
聖フランシスコザベリヨ 我等の為に願い給へ  
在 長崎  
一千八百八十四年四月三十日  
南緯日本聖会司教 ベルナルド



## 大浦天主堂を創建したパリ外国宣教会の宣教師たち



### ジラルール神父

1821年、フランス生まれ。日本の開国前、沖縄で日本語を習得し、1858年にフランス領事通訳として横浜に上陸。日本布教総責任者として横浜天主堂を建て、大浦天主堂建設のためにヒューレ神父とプティジャン神父を長崎に派遣。1867年に死去。



### ヒューレ神父

1816年、フランス生まれ。沖縄で日本語を学び、1863年に長崎に入って司祭館を建設。次いで天主堂建設に着手するが、日本での宣教の将来に悲観し、フランスに帰国。信徒発見後に再来日し、長崎や横浜で活動。フランスに帰って1900年に死去。



### プティジャン司教

1829年、フランス生まれ。24歳で神父になり、様々な経験をつんだあと、1860年に沖縄でジラルール神父やヒューレ神父とともに日本語を学ぶ。

1862年に横浜に上陸、翌年にヒューレ神父を追って長崎に入り、二十六聖人の殉教地を探す。ヒューレ神父の帰国後、苦勞しながら大浦天主堂を完成させた。

1865年3月17日、大浦天主堂を訪ねた浦上の潜伏キリシタンが信仰を告白する「信徒発見」に立ち会う。しかし、徳川幕府と明治政府のキリシタン取締りで、浦上キリシタン全員が流罪(流配)となり、その釈放に駆け回る。

1873年、キリスト教が黙認されると、日本使徒座代理区長として各地の潜伏キリシタンをカトリックに復帰させ、神学生の教育に努めた。日本が2つの使徒座代理区に分割されると、南緯使徒座代理区長として大阪や長崎を拠点に活動した。1884年、長崎で死去、55歳。信徒発見が行われた場所の床下に眠っている。

## 大浦天主堂と外国人居留地、長崎港の賑わい



1872年(明治5年)に上野彦馬がドンの山中腹から撮影した外国人居留地の様子。左にある大浦天主堂は、創建時の特徴的な3つの尖塔のうち、両サイドの小塔はすでに取り払われている。手前の外国人居留地には洋館が建ち並び、当時の長崎の繁栄がうかがわれる(長崎大学附属図書館収蔵(部分))

## 創建時の大浦天主堂

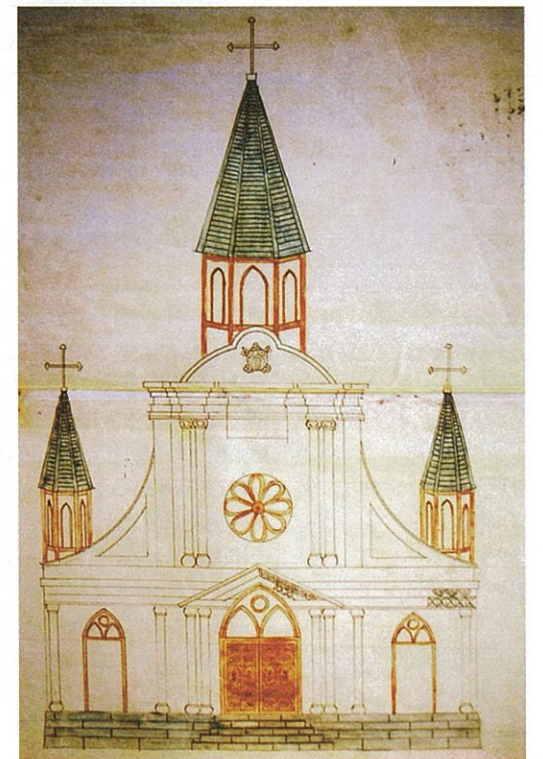
グラバー邸建設者でもある天草の棟梁小山秀之進は、「ふらんす寺」と呼ばれる教会を1864年末に造り上げた。黒い壁に格子状の白いナマコ壁が印象的で、プティジャン神父は「やがて地より湧き出ようとしている可愛い天主堂」と表現。1865年2月19日に日本布教総責任者のジラルール神父が献堂式を行った(写真は上野彦馬撮影、江崎べっ甲店所蔵)。

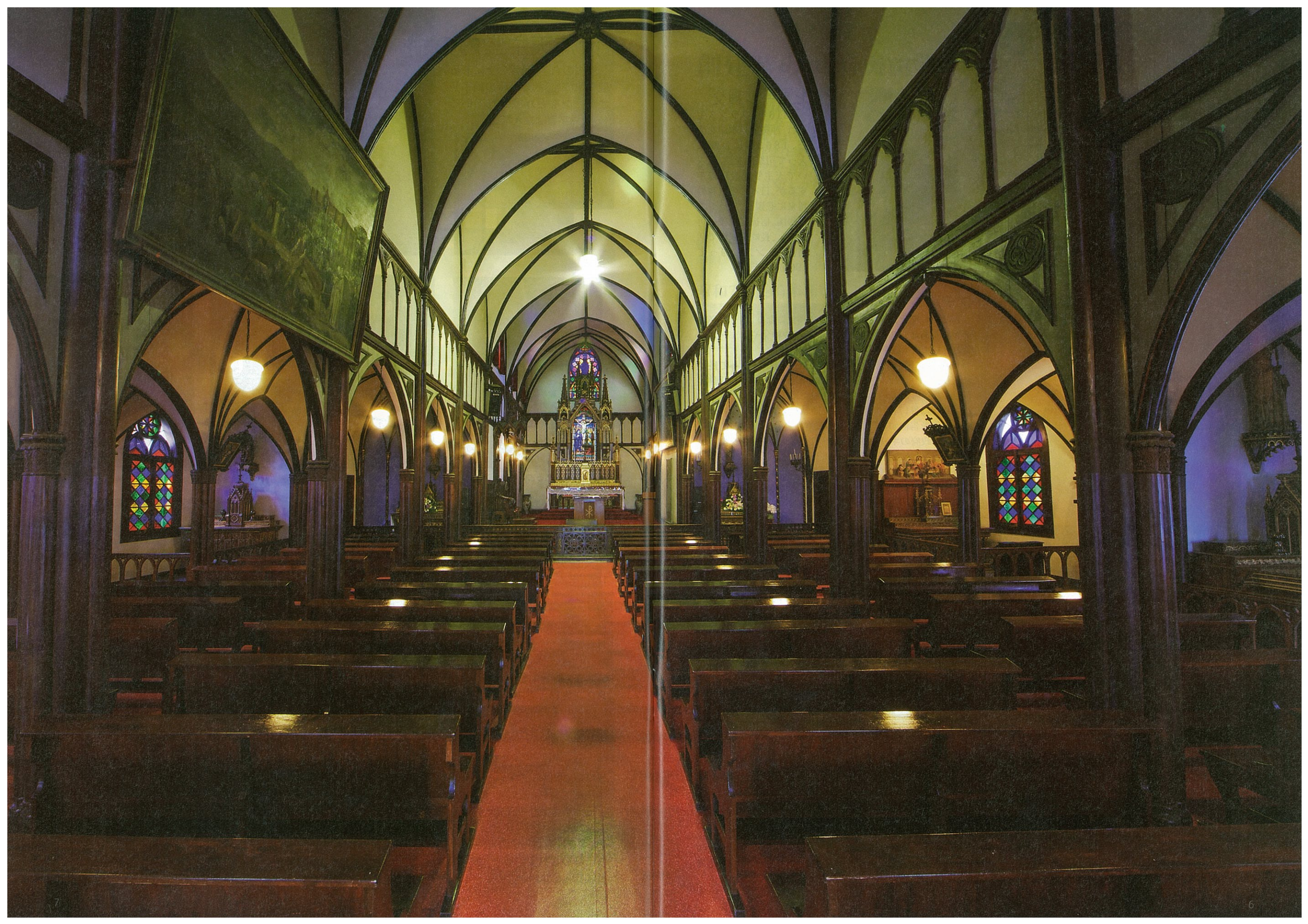
右下は、2007年1月にパリ外国宣教会本部で、長崎総合科学大学の林一馬教授が発見した大浦天主堂の設計図の一部。プティジャン神父が建設資金の工面を願い出した手紙に同封したものとみられ、完成後の姿と酷似している。

## 昭和7年長崎市街図

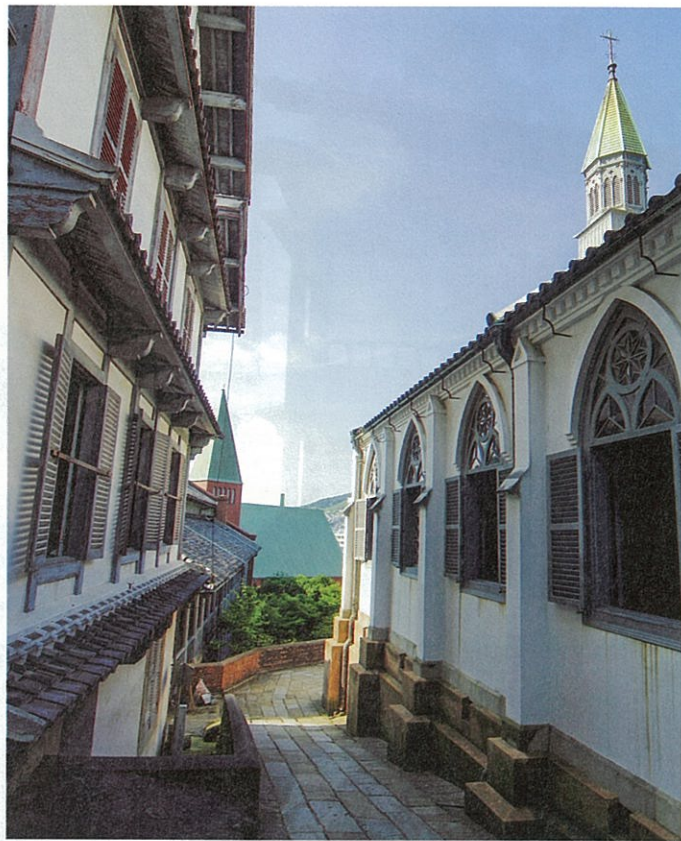


ブライアン・パークガフ二氏所蔵





## 大浦天主堂の外観等



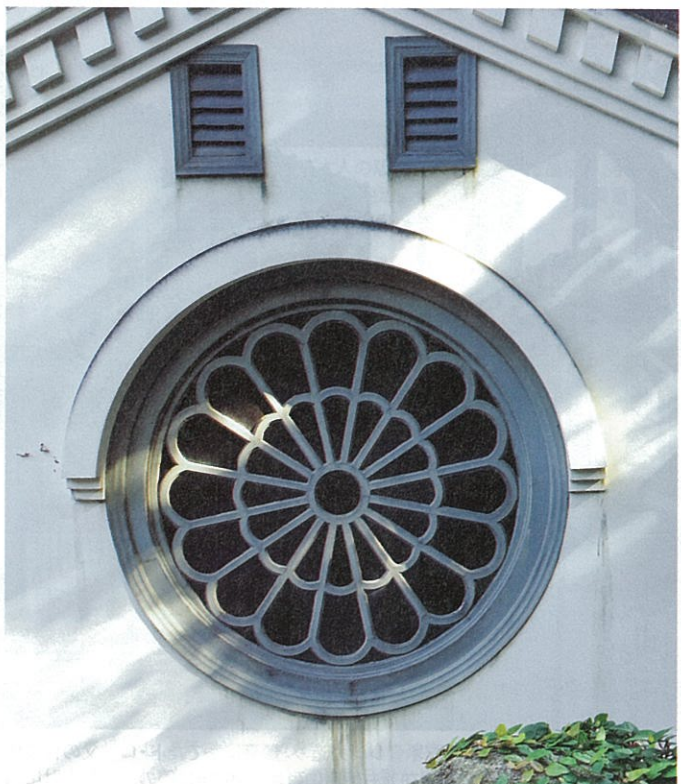
天主堂と旧羅典神学校の間の道は、多くの神学生が行き交った。



背後からみた大浦天主堂



外から見た天主堂の窓



創建当時、正面にあったバラ窓。明治期の改築の際に天主堂の後部にはめ込まれた。



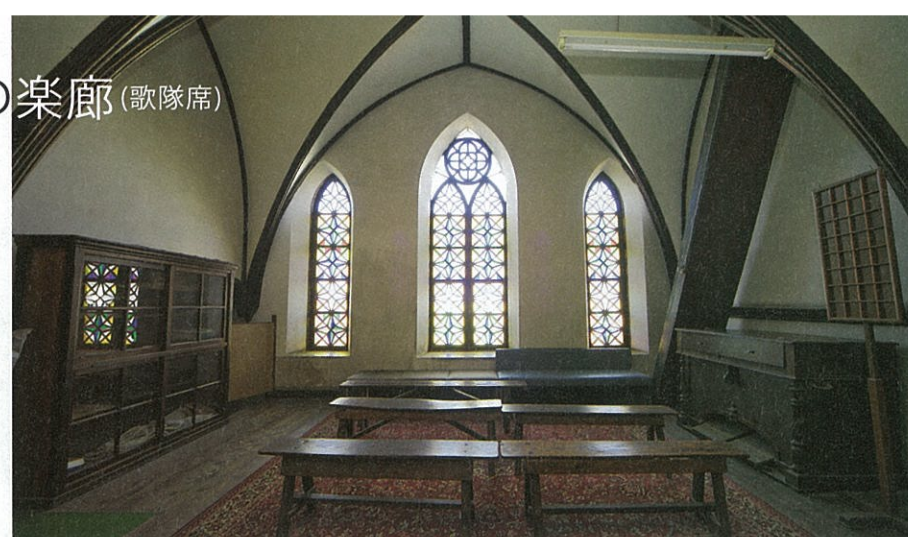
旧羅典神学校に隣接する旧大司教館（一般見学者は立入禁止）



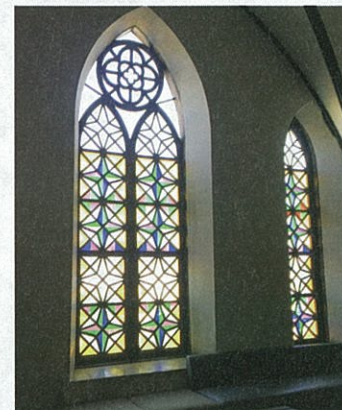
井戸水を使って、顔や手を洗っていた昔の洗面所。当時は湿気で建物が傷むのを防ぐため、洗面所やトイレなどを外に造っていた。

## 大浦天主堂内の楽廊（歌隊席）

堂内の右手、階段の上にある聖歌隊の席。創建当時の椅子やオルガンなどが置かれている（一般見学者は立入禁止）。



創建当時からある古いオルガン



## 教会鐘（鐘楼）

大浦天主堂が創建された1865年にフランスの信仰篤きカトリック信者から寄贈された鐘。フランスのル・マン市のボレ（Bollee）父子によって制作された。青銅製で、高さ82cm、径97cmである。

お寺の梵鐘も提供させられた第2次世界大戦中も、貴重な文化財として提供をまねがれる。終戦後の1945年12月、振子を吊っていた厚い牛皮が切れて困っていたところ、進駐軍の軍曹が軍倉庫の牛皮で同一品を手作りして寄贈。その日の晩鐘から鳴らすことができたという。

かつては人力で鳴らしていたが、現在は自動で正午と午後6時に鳴らされている（一般見学者は立入禁止）。



鐘の銘には以下の文（訳）が刻されている。

「私はクロチルド・アドルフ・ルイズという名前です。1865年フランスのル・マン市に生まれ、その地の司教シャルル・ジャン・フィリオン台下に聖別されました。私の代父はシャルル・アドルフ・ドルジェ伯爵で、代母は、アンナ・クロチルド・ドロリエル夫人でした。ボレ父子が私の鑄工であり、調律師です。」

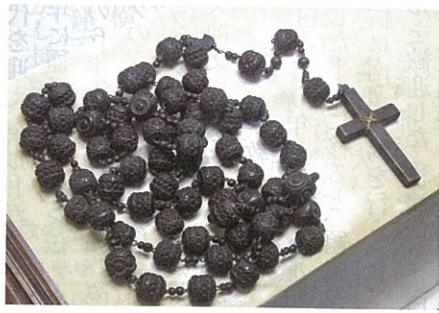


天主堂の後方にあり、2階建て4坪、階上に鐘がある。

## キリシタン資料室の展示物



禁教時代、潜伏キリシタンがマリア像に見立てて拝んだとされるマリア観音。



プティジャン司教がフランスのルルド巡礼の記念に持ち帰り、伊王島の伝道婦で社会事業家の太田エンに与えたロザリオ



プティジャン司教から日本の殉難教徒への手紙 (ド・ロ神父による日本語石版印刷)



### 南蛮鉦(つば)

16~17世紀、南蛮船が運んできた調度品の模様に端を発し、大名や若い武士の間に流行した南蛮船や十字架などをあしらった南蛮鉦(キリシタン鉦)。異国情緒あふれた構図などが珍重され、日本の鉦工も取り入れて平戸や長崎などで制作するようになった。



ド・ロ版画。明治10年頃、ド・ロ神父が日本人の版画師につくらせた墨刷り、手彩色の宗教画。天国と地獄を描いたものなど、明治初期の大宗教画として貴重であり、版木10枚も現存している。(左1枚、右3枚の黒い板が版木)



伊王島の大明寺教会が聖像の代わりに飾っていた版画。大明寺教会が愛知県のみつ村に移築される際、大浦天主堂に預けられた。



1930年(昭和5年)、ポーランドから来日したコルベ神父は到着直後の4月24日から司教館で過ごし、5月初めにこの建物に移り、神学校で哲学を教えた。それを記念して資料館1階を神父に関する資料展示室としている(神父は第2次世界大戦中、アウシュビッツ収容所で、若い父親の身代わりとして1941年に殉教)。



コルベ神父が長崎に来て1か月後に出版した『無原罪の聖母の騎士』(1930年5月24日発行)。ラテン語の原稿を日本人神父が翻訳し、ポーランド人修道士が、よく似た活字を探し出して印刷。分かりやすい内容で好評となり、現在に続いている。

## ら てん 旧羅典神学校 (キリシタン資料室)



## 長崎における 神学生教育の歴史

信徒発見の年には早くも神学生の育成が始まる。当時は禁教下で、司祭館の屋根裏に秘密部屋「無原罪の御やどりの間」をつくり、神学校の前身となった。浦上四番崩れのときは、神学生はマレー半島のペナン神学校などに留学させている。

キリシタン禁制が解けた翌年(1874年)、神学予備校が開かれ、1875年にド・ロ神父の設計で本格的校舎が建てられた。予科と本科をあわせて12年で授業はラテン語で行ったため、羅典神学校と呼ばれる。1882年に日本人神父3人が誕生して以降、多くの卒業生を輩出し、日本全国で活躍した。



構造は、骨になる木材をレンガではさみこんだ木骨レンガ造り。建築に秀でたド・ロ神父の代表作のひとつで、極めて堅牢。100年以上を経た現在でも使用に耐え、1992年に国の重要文化財に指定された。